

Title	ソグド語仏典解説
Author(s)	吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 1992, 7, p. 95-119
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/18757">https://hdl.handle.net/11094/18757</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ソグド語仏典解説\*

吉田 豊

## 0. はじめに

今世紀の初め、ヨーロッパ各国及び日本からの探検隊によって、多くのソグド語文書が中央アジアで発見された。<sup>(1)</sup> 主な発見地は敦煌とトゥルフアンであるが、若干の断簡がクチャ、コータン、シオルチュクでも発見されている。現在までのところ、仏典がみつまっているのは、敦煌、トゥルフアン及びシオルチュクである。

これらのソグド語文献は、主にロンドン、パリ、ベルリン、旧レニングラード、京都に保管されている。零細なコレクションには、例えばヘルシンキにある Mannerheim のものなどをあげることができる。<sup>(2)</sup> 1980—81年にトゥルフアンのベゼクリクで発見された断片類については、吉田 1991 を参照せよ。<sup>(3)</sup> このうち、ロンドン、パリ、旧レニングラードにあるものは、殆んどすべてが公刊されている。ソグド語文献全体の中で、仏典が占める割合は非常に大きい。敦煌発見のものでは殆んどが仏典であるし、トゥルフアン出土のものでも、ソグド

\* 本稿は、現在刊行中の *Encyclopaedia Iranica*, New York, 1981~ (1992年5月現在 vol. V, Fascicle 6 まで既刊) の *Buddhist literature in Sogdian* と題する一項目として執筆し、1990年9月に脱稿したものである。この項目は、編集の過程で追加されたもので、別に予定される補遺に収録されるとのことであった。本来英語で書いた本稿の日本語版をここに発表するのは、上で述べた事情により出版が何時になるかわからないという状況と、仏典については特別に高い興味を持つ日本の東洋学者に、より接し易い言語で本稿を提出することが有益であると考えたからである。勿論、ここに発表された日本語版は、原稿の単なる日本語訳ではなく、脱稿後得られた知見や、原稿では省略せざるを得なかった注釈もつけ加えておいた

(1) ここでは、1930年代にムグ山で発見された所謂ムグ文書は扱わない。

(2) N. Sims-Williams and Halén, H. 1980参照。この種の零細なコレクションの全貌を把握することは至難である。最近、静嘉堂文庫に、極めて小さいものではあるが1点、ソグド語の断片があることを知った。このコレクションの存在に筆者の注意を喚起してくれた榮新江氏に感謝する。

(3) 北京大学の榮新江氏が1990年12月に、京都大学人文科学研究所で行った講演によれば、北京大学や北京図書館には何点かのソグド語文書が所蔵されているらしい。

文字で書かれたものの3分の1以上は仏典である。<sup>(4)</sup>

## 1. ソグディアナの仏教

ソグドの仏教を問題にする場合、当然ソグド語仏典の存在にもとづいている。しかしこれらはすべて現在の中国領で発見されたものであり、ソグド本土からは1点も仏典はみつかっていない。実際のところ、ソグド本土（すなわちオクサスとヤクサルテスにはさまれた地域の南東部、ザラフジャン及びカシュカダリヤの流域）での仏教の実態については殆んど何も知られていない。この地域で仏教が行なわれていたことの証拠として、次のような事実がしばしばあげられる：(1) アフラシヤブやペンジセントの壁画にインドの影響がみられること、cf. A. M. Belenitskii and Marshak, B. I., 28-30; (2) 初期の漢訳仏典の訳経僧に、康姓の者が何人かみられ、康姓は普通サマルカンド出身のソグド人が中国で帯びる姓であること、cf. B. Nanjio, 383ff, nos. 8, 10, 14, 21, 41; (3) ソグド語に導入され定着した借用語の中に、仏教用語に由来するものがある。例えばマニ教文献には *smyr* (<Skt. *sumeru*-) がみられ、W. B. Henning は、マニ教が導入されたときソグドでは仏教が盛んであったため、マニ教典をソグド語に翻訳する場合にも、仏教用語を用いたのだと考えた、cf. Henning 1936, 5 及び 1943, 55-56; (4) 玄奘や慧超が、各々7世紀及び8世紀前半に、サマルカンドに僧及び仏寺があったと報告していること、cf. S. Beal, 45; W. Fuchs, 452.

しかしこれらのうち(2),(4)は、ソグド本土で仏教が根をはっていた証拠にはなり得ない、cf. R. E. Emmerick 1983, 956-61. このことはまた、8世紀前半のムグ文書に、仏教の影響が一切みられないことから確認される、cf. V. A. Livšic 1962, 166. (1)の点に関しては、7世紀以降に導入されたヒンドゥー

---

(4) 筆者は現在、W. Sundermann 氏と共同で、龍谷大学所蔵の大谷コレクション中のソグド語文献のカタログを作成中である。3分の1以上というのは、この作業中に筆者が持った印象である。これはまた、レニングラードのコレクション中のトゥルフアン出土と思われるものについても言える。極小の断片などは分類ができないので、具体的な数字をあげることに積極的な意味はないが、その占める割合が大きいことは理解できよう。

教の影響とする有力な反論が提出されている, cf. Sh. Kuwayama, 724. さらに(3)については, マニ教文献の言語が比較的に新しく(7世紀以降と考えられる), その頃ソグドで仏教が盛んであったとは考えられないから, Henning の前提がくずれてしまう. また, Sims-Williams は, マニ教典にみられる仏教用語は, 仏教徒が使っていたものを借用したもので, 特にソグド語全体の基礎語彙であることを前提にしないとする, cf. Sims-Williams 1983, 136. また W. Sundermann は, ソグド語に入ったインド来源の借用語の古層のものは, パルティア語経由で導入されたのではないかと考えている, cf. Sundermann 1982.<sup>(5)</sup>

## 2. ソグド語仏典の原典

ソグド語仏典の多くは, 漢訳仏典からの重訳であることが証明されている. しかもそれらの中には, 中国で作られた所謂偽経も含まれている. 奥書きから知られる翻訳地には, 敦煌(下記 no. 7 (i)), 長安(no. 38), 及び洛陽(no. 37)がある. 漢訳仏典からの重訳であることは, F. Weller がかつて, 下の nos. 1 (i), 16 (i), 19及び21で行ったような, ソグド語訳と漢訳との綿密な対照から明らかである. またソグド語の訳文の中には, 漢訳を仲介したものとして始めて説明できる誤訳がある,<sup>(6)</sup> cf. D. Utz 1988, 29. 実際漢文の一字一句をあまりに忠実に翻訳したために, ソグド語として理解できないような訳文さえ存在する, cf. TSP 142, 222 及び Utz 1988, 32. 従って, ソグド語仏典の殆んどは, 中国や東トルキスタン在住のソグド人が, 自分たちのために翻訳し使っていたものと考えてよいであろう, cf. Emmerick 1983, 961. 中国在住のソグド人が, 中国仏教を受け容れていたことは, 漢訳仏典をソグド文字で音写した資料が残されていることから知られる, cf. O. Hansen 1968, 84 n. 2 及

(5) ソグド語に導入されたインド来源語彙については, 別に専論を準備中である.

(6) 例えば, Pelliot sogdien 2, 11. 646-47 に  $\beta nt$   $ptkry'k$   $pwstk$  という表現があり, 「縛象(經)」に対応している.  $\beta nt$  は「束縛」を  $ptkry'k$  は「像」を意味するので, 原文の「象」を「像」に読み誤ったものであることがわかる, cf. TSP, 177-78.

び吉田 1990 a 98-100.

しかしながらソグド人は、必ずしも中国仏教だけに依存していたわけではなかった。ソグド語仏典の中には、その奥書きに、漢語以外の言語から翻訳されたことを明記しているものが2点存在する。そのうちの一つは(下記 no. 44)、未比定の断片だが、クチャ語(つまりトカラ語B)から翻訳されたと記している、cf. Henning 1940, 59-62. 同様に *Daśa karma patha-avadāna māla* (no. 11) のソグド語訳も、クチャ語から訳されたものと考えられる。何故なら、この仏典のウィグル語訳はクチャ語からの翻訳であることが、奥書きに示されているからである、cf. Henning 1949, 160 n. 2; G. Ehlers, 22 n. 32 及び P. Zieme, *OLZ* 83, 1988, 460.<sup>(7)</sup> これら2点の仏典の存在は、タリム盆地の北道のソグド人仏教徒と、クチャを中心とする小乗仏教との関連を示唆する。<sup>(8)</sup>

二つめは一般に「酒を誡める経」(no. 37)と呼ばれている敦煌出土の仏典で、その奥書きにはインドの本から翻訳したと書かれている。<sup>(9)</sup> 実際ソグド僧が仏教梵語を知っていたことは、ソグド語仏典中の借用語、ソグド文字で表記されたダラニ (nos. 4, 7, 8, 9) やサンスクリットの韻文 (no. 7) から明らかである。研究が進めば既存のテキストの中にも、サンスクリットから訳された仏典が見つかる可能性がある。1つの疑わしい例として、*Pelliot sogdien 7* をとりあげてみよう。<sup>(10)</sup>

P7 は *Amoga pāṣa hṛdaya-sūtra* 『不空罽索呪心経』のソグド語訳である。

(7) Henning は、ウィグル語訳の直接の原典はソグド語版ではないかと考えたが、敢えてそのように推測しなければならない理由はない。

(8) キジルの千仏洞にはソグド語の落書きがある、cf. 吉田 1990a, 93 n.10. 筆者は初めこれも、クチャとソグド人仏教徒との関連を示すものだと考えた。しかし、クムトラに同様の落書きがあるのを発見するに及んで、この考えが必ずしも正しくないと考えようになった。クムトラの落書きのソグド語には、トルコ語の要素がみとれるので、トルコ人によって書かれた可能性があるからである、cf. 吉田1991, 68-73. トルコ人によって書かれたソグド語仏典がある可能性については下記も参照せよ。

(9) この奥書きについては、D. Maue and Sims-Williams, N., 487 n.10 も参照。

(10) 最近トゥルファン出土のサンスクリットとソグド語の対訳医学文献が発表された、cf. Maue and Sims-Williams. 発表者たちは、ソグド語の表記法に、ブラーフミー文字表記のウィグル語資料との深い関連があることを指摘している。このことと、ウィグル人がソグド語を使っていた事実を考えあわせると、当該の資料は、必ずしもソグド人がサンスクリットを使っていたことの証拠に使うことはできないと考える。

テキストを校訂した E. Benveniste は、この經典の5種の漢訳のうち、菩提流志訳 (T.T. 1095) が最もソグド訳に近いとした、cf. TSP 93. その際 Benveniste は漢訳が原典であることを当然のことと考え、その他の可能性については考慮しなかった。彼の説は、その後一般に受け入れられるところとなった、cf. Hansen, 87; Utz 1978, 9; BSTBL 160; M. Dresden, 1222. 筆者は漢訳とソグド訳を対照する過程で、全体として内容は一致するものの、細部ではソグド語訳はどの漢訳とも一致しないことに気付いた。<sup>(11)</sup> さらに積極的にサンスクリットが原典であったことを示唆する事実もある。第1に、ソグド語訳の26行に *βyr'wkt'yn* という語がみえる。これは「勝観」という名の世界の名であることは明らかであるが、Benveniste はサンスクリットと思われる原語を比定することができなかつた。<sup>(12)</sup> これに対応するサンスクリット語版には、*vilokitayām* とあり、これは *vilokita-* の単數位格形である。<sup>(13)</sup> ソグドの *βyr'wkt'yn* が *vilokitayām* の転写形であることは明らかである。活用した形式を借用することはありにくいので、この例はソグド語訳者がサンスクリット原典を見ていた可能性を示唆する。

第2に、この経を読誦することの功德を述べる件りで、その動機がどれ程不純であってもかまわないことを述べる箇所がある、cf. 11. 101 sq. そこにあげられた動機を各版で比較すると次のようである。

ソグド語

1. *c'wn mnkyh* 「敵対心から」<sup>(14)</sup>
2. *cnn xypō'w'nt pckwryr* 「主人に対する怖れから」

(11) Benveniste 自身、漢訳との不一致には気付いていた。彼は次のように言っている：‘Le texte paraît traduit sur la version chinoise de Bodhiruci, rédigée en 693 ap. J.-C. (Taishō 1095). C’est du moins avec cette traduction qu’il montre le plus de ressemblances; mais en maint endroit il s’en écarte ou l’abrège fortement,’ cf. TSP 93.

(12) Viruktena を提案しているが、このようなサンスクリット形は存在せず、彼自身クエスチョンマークを付している。

(13) サンスクリットのテキストは R. O. Meiszahl が校訂したものに依った。

(14) *mnk* は従来 ‘fraud, deceit’ を意味するものと考えられていた。Sims-Williams 博士からの教示により、‘rivalry’ と訳するのが適切であることを知った。

3. pr 'nyw "ḍ'k ws'yḍ 「他人に薦められて」  
 4. c'wn rym'yṣ pyḍ'r 「(他人の) 非難のため」  
 サンスクリット T. T. 1093 T. T. 1094

1. anyonya-spardhā 1. 共他闘争 1. 勝他  
 2. svāmibhaya 2. 驚怖大家 2. 怖主  
 3. parānuvṛtti 3. 護他意 3. 求高貴  
 4. uccagghana 4. 調戯 4. 多財寶

T. T. 1092

T. T. 1095

1. 勝他 5. 財利 1. 欲勝他 4. 怖悪獣 7. 求尊貴  
 2. 嫉妬 6. 軽戯 2. 怖主 5. 怖危難 8. 求財寶  
 3. 詔証 7. 依他 3. 怖怨讐 6. 隨他  
 4. 恐怖

なお T. T. 1099には対応の部分がない。ソグドのものは理由が4つであることと、内容の点からサンスクリットに最も近い。少なくとも、Benvenisteが原典と考えた T. T. 1095との乖離が最も著しいことがわかる。<sup>(15)</sup>

第3に、ダラニの部分(1.229)に、rkṣ' p'ṣtw kry'n 'sy' pykṣw とあり、これはサンスクリットの rakṣā bhavatu kalyāṇasya bhikṣoḥ に環元でき<sup>(16)</sup>る。これに対応する箇所は、漢訳を初めとする他の版では rakṣā rakṣā mama/mām としして人名をあげるのみである。これも漢訳を原典としては説明し難い。

上述の3点を根拠にして、ソグド語訳の原典がサンスクリットであったことが完全に証明できたとは考えない。しかし既存の漢訳を原典と見なすことはできないことは明らかであろう。

ソグド語仏典の原典に関しては、別に次のような2つの問題がある。その一

(15) 漢訳の中では T. T. 1093 が近い。なお、筆者の調査によれば、敦煌からは T. T. 1094 の写本しかみつかっていない。

(16) この部分は既に吉田1985, 191で報告した。その後 P. Zieme 博士より、kry'n 'sy' は Skt. kalyāṇasya の音写である旨教示を受けたので、それに従って以前のを訂正しておく。

つは、下の nos. 38-40 のように、いくつかの漢文仏典（中には偽経も含まれる）からの引用を含むテキストの存在である。各テキスト全体の比定ができていないので、これらが本来いくつかの漢文仏典をつなぎあわせた仏典からソグド訳されたものか、漢文仏典に通暁したソグド人自身が編集したものか今のところ判断できない。

二つめは、nos. 10, 14, 17, 22 (ii), 26 の場合で、これらは内容から特定の仏典に比定できるが、既存のどの言語のテキストとも一致を示さない。これらは、何らかの原典をもとにソグド人が自由にアレンジし直したものか、或いは未知の原典からの翻訳であるかのいずれかであろう、cf. Utz 1978, 13 及び Sims-Williams 1981, 234。例えば、ソグドの *Vessantara Jātaka* は、既存のものの中では漢訳に最も近いとされるが、それとも一致しない点が多に、cf. Gauthiot。また他のソグド語仏典と比べて、極めてこなれた文体で書かれており、原典からの翻訳というより、このジャータカをモチーフにしてソグド人自身が創作したという印象を与える、cf. Sims-Williams 1989, 175。そしてこの推定を多少とも裏づける証拠がある。ジャータカの主人公の *Viśvantara* のソグド名は *swδʾšn* というが、この名の語源は最近 Sims-Williams によって明らかにされた。彼によれば *sw-* はインド語の *su-* にさかのぼるが、*δʾšn* はイラン語の単語で「贈りもの」を意味する。つまり *Viśvantara* のニックネームである *sudāna* 「善与」の前半を借用し、後半を翻訳した名であるという。このソグド名を玄奘は知っていたらしい。彼はその『一切経音義』（A. D. 649 撰述）中で、*Viśvantara* の名である須大掣に注して、「…或言須達掣或云蘇陀沙掣此訳云善与亦言善施」という。蘇陀沙掣は *swδʾšn* に対応するものに違いない。玄奘はソグド語版を知っていて、それが漢訳本とは独立した一系統であるとみなしていた可能性がある。

### 3. 翻訳の年代

奥書きに翻訳の年次が記されている唯一の例 (no. 37, 開元16年 = A. D. 728



年)を除けば、ソグド仏典が何時作成されたかを特定することができない。因みにP2の奥書きから呉其昱が提案した紀年の762年は受け容れ難い。彼の説は奥書のき中の  $\beta\gamma\beta'r$  が  $*\beta'\gamma\beta\text{wr}$  「天子」であるとする解釈にもとづいているが、 $\beta'\gamma\beta\text{wr}$  という語は存在しない。しかも「天子」を意味するソグド語は  $\beta\gamma\text{pwr}$  であり、 $\beta\gamma\beta'r$  とは余程異なる。

ソグド語仏典の年代を決定するには、いくつかの事実を考慮する必要がある。第1に、原典の翻訳年代である。知られている限りで最も遅いものは下記の no. 6 で、原典は746-771年に活躍した不空によって翻訳された。第2には紙質である。Sundermannによれば、no. 3 (i) 及び 20 は7世紀後半から8世紀の終わりの頃の紙であるという、cf. Sundermann 1989, 14-15. 第3に、敦煌出土の仏典には紙背が廃紙利用されているものがあり、裏に書かれた文書から表の仏典の書写年代の下限を知ることができる。紙背の文書はどれも9-10世紀頃のものにみえるが、残念ながら歴史学者や仏教学者によって本格的に研究されたことはないようだ。<sup>(17)</sup>

たった1例ではあるが、紙背にチベット語で表のソグド語仏典のタイトルを記したものがある、cf. no. 26.<sup>(18)</sup> この書き込みは、敦煌がチベットによって支配されていた時代 (A. D. 786-848) に為されたと考えるのが妥当であろう。これらを勘案すれば、ソグド語仏典の大部分は7世紀から8世紀に作られたと結論してよいと思われる。この頃はまた、中国に於けるソグド商人の活動が頂点に達した時代でもあった。<sup>(19)</sup>

(17) 最近榮新江は、P7 (no. 4) の紙背の文書に言及し、後唐の頃 (10世紀前半) に書かれたものとする。

(18) この機会に、漢文仏典の紙背に書かれたソグド語のタイトルを紹介しておきたい。これは高田時雄氏の発見にかかるもので、この資料の存在を筆者に御教示下さった同氏に感謝する。問題の漢文仏典は北京図書館の所蔵で、奈15 (No. 8724) と番号され、『長阿含經卷第十八輻輪聖王品第三』に比定されている。その背面に一行 'yn'k z'yh 'wstn pwstk 'xw 「これは大地の成立の經典である」と書かれている。『長阿含經』のこの部分は、単行の經典としては『起世因本經』、『起世經』、『仏説樓炭經』(各々T. T. 25, 24, 23) のタイトルで訳出されている。当該のソグド文は明らかに表の經典の内容に合致している。このことから、ソグド文を書いた人間は漢文仏典を読むことができ、しかもソグド語を書くことができたことがわかる。ソグド仏典の翻訳に当たったのはこのような人間であろう。

(19) 例えば敦煌を例にとれば、9世紀以降にはソグド人集落徙化郷の住民は全く漢人社会に没入してしまったという、cf. 池田, 331.

最後にトルコ語の要素が現われるソグド仏典に言及しておかなければならない。No. 1 (ii) の書写人の名は Qutluγ であり (cf. STii, 548; A. von Gabain, 76; Zieme, 17), 仏画に添えられた銘文である P 26 にも, Toγrīl という名が見える, cf. Sims-Williams and Hamilton, 38. さらに P 16 (no. 34) は最後の一行がトルコ語であるが, その筆蹟は本文のソグド語のものと全く同一である, cf. Sims-Williams and Hamilton, 40. これらはソグド語とトルコ語の言語接触の結果であり, 9 世紀の終わり乃至10世紀の間に書かれたものと考えられている, cf. Sims-Williams and Hamilton, 9-10. 筆者自身は, これらを書いたのはソグド語に通じたトルコ人であると考えている. 文語としてソグド語を用いていたトルコ人は, 次第にトルコ語だけを文語として使うようになったが, 10世紀頃はどちらもが使われ得た時代であったと考えられる. 従ってトルコ人によって9-10世紀にソグド語で書かれた仏典が, 今後さらに発見される可能性がある, cf. 吉田1991, 72-73.

#### 4. リ ス ト

下に掲げるのは, 内容の比定が為されたソグド仏典のリストである. その中には便宜のために, 未比定ながら比定が可能な程度の分量を残しているものも含めておいた. ただし, 未発表の文書が残されている現状では, このリストは暫定的なものでしかあり得ないことを強調しておきたい. このリストは (a) 文書の番号, (b) 出土地, (c) 研究書・研究論文 (原則として最新のものだけを掲げる), (d) 対応の漢訳が存在する場合, 『大正大藏経』 (= T. T.) での対応箇所, (e) その他の特筆すべき事項や問題点から成り立っている.<sup>(20)</sup> ロンドン, パリ及び旧レニングラード所蔵の文書のすべては写真版が公刊されている, cf. BSTBL, Benveniste 1940, Sims-Williams and Hamilton, 及び Ragoza. ソグド仏典

(20) この論文の性格上, 筆者がかつて敦煌出土のソグド語文献について書いた解説と重複する部分が少なくない, cf. 吉田 1985.

の研究史及びその他の二次文献については Utz 1978 及び Sundermann 1989 も参照されたい。

## A. 般若経関連文献

### 1. 『金剛般若経』

(i) (a) Or. 8212 (176), (b) 敦煌<sup>(21)</sup>, (c) BSTBL 3-5, (d) T.T. 235, vol. 8, 749 a 6-21.

(ii) (a) TM 391 (=ST ii 8), (b) トゥルファン, (c) ST ii 544-48, (d) T.T. 235, vol. 8, 752b-c2, (e) この同じ写本に属する別の断片があるという, cf. Hansen, 87. ただし Sundermann 1977, 634 はそれを否定する。

### 2. 『金剛般若経』に対する未比定の注釈

(i) (a) ドイツのトゥルファン探検隊将来の断片群, cf. Sundermann 1977, 634, (b) トゥルファン, (e) 貝葉型写本の端に書かれたタイトルは  $\beta\zeta\gamma\text{rn}'y$   $\text{pr}'\text{tny}'$   $\text{wy}\delta\beta'\gamma$  であり, これは vajracchedikāprajñā-sāstra と還梵できる。<sup>(22)</sup>

(ii) (a) ドイツのトゥルファン探検隊将来の断片群, cf. Sundermann, *ibid.*, (b) トゥルファン, (c) タイトルは  $\beta\zeta\gamma\text{rn}'k$   $\text{wy}\delta\beta'\gamma$  で, vajra-sāstra と還梵できる。1つの断片 (So 13600) には T.T. 235, vol. 8, 750b 14-18<sup>(23)</sup> に対応する箇所がある。

### 3. 『摩訶般若波羅密経』

(i) (a) L11+K48, (b) トゥルファン, (c) Kudara and Sundermann 1988 及び plate I, II, (d) T.T. 223, vol. 8, 399a6-26.

(ii) (a) L78, (b) トゥルファン, (c) Yoshida 1986, 513-17, (d) T.T. 223, vol. 8, 295c23-28, (e) 先行のものは卷子本であり, 本断片は貝葉本である。従

(21) この文書は一般に敦煌出土と考えられている, cf. BSTBL, ix. ただ通常の敦煌出土の仏典とは余程異なる草書体で書かれているので, 出土地に関して多少不安が残る。

(22) これは Sundermann による提案。wyδβ'γ は「説明」などを意味するので「論」に対応するものと考えられる。しかし「品」に対応する例も知られているので, 「金剛般若品」とも還元できる。

(23) このことは, ハンブルグ大学所蔵の写真から筆者が発見した。

って同じ写本に属するものではあり得ない。

## B. 密教文献とダラニ

### 4. 『不空絹索神呪心經』

(a) P7, (b) 敦煌, (c) TSP 93-104, (e) 原典の問題については上記参照。

### 5. 『觀世音菩薩秘密藏如意論陀羅尼神呪經』<sup>(24)</sup>

(i) (a) Or. 8212 (158), (b) 敦煌, (c) BSTBL 12-17, (d) T.T. 1082, vol. 20, 199b12-200a2

(ii) (a) P14, 11. 1-16, (b) 敦煌, (c) TSP 137-38, (d) T.T. 1082, vol. 20, 199c15-23, (e) この部分は先行のテキストの11. 51-63に対応する, cf. Henning 1945, 465 n. 2. P 14, P 15 及び P 30 全体については下記 no. 40 参照.

(iii) (a) P 15, 11. 17-31+P 30, (b) 敦煌, (c) TSP 141, (d) T.T. 1082, vol. 20, 199c24-200a4, (e) 極小断片 P 30 が P 15 の11. 23-26を補うものであることについては Sims-Williams and Hamilton, 11 参照.

### 6. 『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』

(a) P14, 11. 20-37, (b) 敦煌, (c) TSP 138-39, (d) T.T. 1085, vol. 20, 204a21-c3, (e) 仏部三昧耶印の図も描かれている。<sup>(25)</sup>

### 7. 『觀自在菩薩百八名讚(擬)』

(i) (a) P 8, (b) 敦煌, (c) TSP 105-15 及び Henning 1946, 735-38, (e) Benveniste は本文中に引用されたタイトルの  $\beta\gamma'n 'sk'tm \delta'm\delta'r'k 'ry'\beta'r'wk\delta y\delta\beta r pwtyst\beta mx'st\beta 100 'st n'm swtr \gamma w\beta ty'kh pwtst$  「諸天中の最高のもの, 世間の保持者, 聖觀自在菩薩摩訶薩の108の名の經典(を?) 讚える經」をもとに Avolokitesvarasyanāmāṣṭaśatakastotra と還梵した。しかし, 類似のタイトルを持つ 『聖觀自在菩薩一百八名

(24) この仏典の梵語タイトルは, 従来 Nanjio no. 321 に従って Padmacintāmaṇi-dhāraṇī-sūtra と呼ばれてきたが, 岩本裕 1978 はソグド語訳を参考にして, Cakravartīcintāmaṇi-dhāraṇī-sūtra とすべきだと主張している。

(25) P14 のこの部分と印の図は筆者が比定した, cf. Yoshida 1986, 522.

経』(T. T. 1054)とは全く別の經典である。残存部は、諸菩薩への頂礼(namo)と、それにつづく未比定のダラニ及びその功能、さらに奥書きから成り立っている。紙背に漢字で書かれた「仏名並陀羅尼」という一句は、内容とよく一致するので無関係であったとは考えられない。テキスト中には別に6箇所、梵文の韻文をソグド文字で転写した部分がある。そのうちの3つは、Udānavarga からの引用である：11. 43-44 = Uv. 30. 5 (762), 11. 52-53 = Uv. 26. 31 (596), 11. 163-64 = Uv. 27. 34 (643)<sup>(26)</sup>。奥書きには、本仏典が康(x'n) 姓の cwr'kk 及びその一族の廻向のために敦煌で翻訳された旨が述べられている。

- (ii) (a) P 8<sup>bis</sup> 及び Or. 8212 (111), (b) 敦煌, (c) TSP 116-17 及び Sims-Williams 1976, 51-53, (e) 先行のテキストと別の写本。このことから、本經典が敦煌のソグド人仏教徒の間で愛好されていたことがわかる。

8. 『千手千眼觀自在菩薩廣大円満無礙大悲心陀羅尼呪本』

- (a) Or. 8212 (175), (b) 敦煌, (c) L. de La Vallée Poussin and R. Gauthiot 及び S. Lévi 1912, (d) T.T. 1061, vol. 20, 112, (e) プラーフミー文字によるダラニの行間にソグド文字による転写が書かれている。現在入手できる写真では、de La Vallée Poussin and Gauthiot の提出するテキストより一紙分多い。従ってこのダラニは最初の3句を欠くのみでほぼ完全である。従来 Nilakaṇṭha-dhāraṇī と呼びならわされているが、T. T. 1061と同一であることは Lévi が明らかにした。ただこのダラニは Nilakaṇṭha-avalokiteśvara (青頸觀自在菩薩) のもの (T. T. 1111) と殆んど同じである。この点はソグド語版中に言及する経名の 1-LPw ḍsty "ry'βr'wkd'yšβr nyrknt n'm t'rny 「千手の聖觀自在菩薩(で)青頸という名のダラニ」も参考になる。なおこのダラニの後に、宋比定の真言が引用されている。その真言のソグド名は wyspw "γδ'k ḍβr'yn'k ḍrzy'wr ptsrwm 「諸願を成就する心呪」である。

(26) Udānavarga のテキストについては F. Bernhard 参照。最後の1つは筆者が比定した。

9. 『佛説地藏菩薩陀羅尼經』

- (a) P18, (b) 敦煌, (c) TSP 148-49, (d) T.T. 1159B, vol. 20, 659b16-c11,  
(e) この珍しいダラニについては敦煌出土の漢文写本 S 4543 も参照せよ。<sup>(27)</sup>

C. ジャータカ及びアヴァダーナ

10. Vessantara jātaḥ

- (a) P1 及び Or. 8212 (80 A), (b) 敦煌, (c) Benveniste 1946, (e) 『太子須大拏經』(T.T. 171, vol. 3, 418-24) が最もソグド語版に近いとされる。ソグド語版と他の言語(パーリ語, チベット語及び漢語)のものとの対照については Gauthiot 1912 参照。ギルギット写本中の Visvantara avadāna は K. Das Gupta によって校訂された。Das Gupta はそこで諸言語の訳と対照しているが、ソグド語版だけは他との相違が著しすぎるため考慮していない, cf. Das Gupta, 9-36.

11. Daśakarmapatha-avadānamāla 「十の行為についての因縁話の花環」

- (a) T i α, (b) ツルファン, (c) 未発表, cf. Henning 1949, 160 n. 2, (e) 原典については上記参照。このアヴァダーナ集の第5章に属する Kañcana-sāra 王の話が残っている。ウィグル語訳については Ehlers 参照。

12. 善・悪2人の兄弟に関する未比定のアヴァダーナ

- (a) L92 (=O<sup>1</sup>), Or. 8212 (88) 及び Or. 8212 (177), (b) 敦煌, (c) Ragoza, 62-63, Reichelt, 57-59 及び Sims-Williams 1976, 53, (e) 仏教用語が<sup>(28)</sup>全く用いられておらず、マニ教の説話である可能性も残されている。

D. 主要な大乘経典

13. 『金光明最勝王経』

- (a) T ii Y 50a(=ST ii 7), (b) ツルファン, (c) ST ii, 539-44, (d) T.T.

---

(27) このダラニは最近筆者が比定した。

(28) 一般に仏典であると考えられているのは、書体が所謂スートラ体(すなわち正書体)であるからであると思われる。しかし、正書体が仏典に限定されず、マニ教典にも使われたことについては Sims-Williams 1981, 239 参照。

665, vol. 16, 426a7-27.

14. 『僧伽吒經』

- (i) (a) L38, 39, 41, 53, 71, 82a, 82b, 84a, 86 (同一の写本の離れ),  
(b) トゥルフアン, (c) Ragoza, 31-32 など及び Sims-Williams 1981,  
233-34, (e) ソグド語版は、既存のサンスクリット, チベット語訳, 漢訳,  
コータン語訳のどれとも一致しない。残された部分の内容はほぼ T.T.  
423, vol. 13, 970 に対応する。
- (ii) (a) L8, (b) トゥルフアン, (e) 貝葉本の断片で、先行の写本とは異  
なる写本に属する。経典の比定は端に書かれた経名によるが、極小断片の  
為に内容が読みとれず対応箇所を特定できない。
- (iii) (a) T iii Š 及びその他の断片群, (b) ショルチュク (?), (c) 未発表,  
cf. Sims-Williams, *ibid.*

15. 『大般涅槃經』

- (i) (a) T ii Y 50b (=ST ii 10), (b) トゥルフアン, (c) ST ii, 550-  
55, (d) T.T. 374, vol. 12, 585b6-c4, (e) これと同一の写本の離れ (T ii  
Y 60) が STii, 556 (=ST ii 10a) に発表されているが、対応箇所は特  
定されていない。
- (ii) (a) T iii 263 及び多数の断片群, (b) トゥルフアン, (c) Utz 1976,  
(d) T.T. 374, vol. 12, 437b22-c, (e) 先行のものとは別の写本。残りの断  
片は現在百済と Sundermann によって研究されている, cf. Sundermann  
1989, 12 n. 15. [後記参照]

16. 『維摩經』

- (i) (a) Or. 8212 (159), (b) 敦煌, (c) BSTBL 18-31, (d) T.T. 475,  
vol. 14, 549a22-550c11.
- (ii) (a) So 10343及び若干の断片, (b) トゥルフアン, (c) 未発表, cf.  
Sundermann 1977, 634, (e) 先行の写本に対応する箇所があり、それを  
対照すると、互いに独立した翻訳であったことが分る, cf. Sundermann,

*ibid.*

17. 『華嚴經』

- (a) L51, (b) トゥルファン, (c) Ragoza, 39 及び Yoshida 1986, 517-18, (e) サンスクリット, 漢訳, チベット語訳に比べて極端に短く, 写本の1-5行は T.T. 279, vol. 10, 342b21-23に, 6-11行は同342c19-22に対応している.

18. 『楞伽阿跋多羅宝経』

- (a) P 2, 11. 603-913, (b) 敦煌, (c) TSP 30-43, (d) T.T. 670, vol. 16, 513 b22-514b, (e) ソグド語訳では漢文原典を 4つの部分に分け配列を変えてある, cf. TSP 186-92. P 2 のテキスト全体については下記 no. 38 参照.

19. 『観仏三昧海経』

- (a) Or. 8212 (85), (b) 敦煌, (c) BSTBL 53-77, (d) T.T. 643, vol. 15 690c6-692c27, (e) ソグド語学者はこの経典を *Dhyāna-text* と呼び慣わしている. 漢文原典との詳細な対照は Weller 1936-37及び1938 によって行なわれている. それによれば漢訳のテキストに異読がある場合, ソグド語のテキストは, 日本にある7世紀の写本と一致するという, cf. Weller 1936-37, 350-51. 類似の事例については Kudara and Sundermann 1987, 334-40 参照. 紙背のウィグル語と漢文については森安, 29-30を参照せよ.

20. 『思益梵天所問経』

- (a) T iii Stadthöle 及び7つの断片, (b) ショルチュク, (c) Kudara and Sundermann 1991, (d) T.T. 586, vol. 15, 55b13-56a3, (e) ショルチュク出土であることは番号から知られる. この文書により焉耆地区にもソグド人仏教徒がいたことが明らかになった, cf. Sundermann 1989, 14.

E. その他の大乘経典

21. 『長爪梵志請問経』

- (a) P5, 11. 1-88, (b) 敦煌, (c) TSP 74-79, (d) T.T. 584, vol. 14, 968, (e) この経典のサンスクリット原典は最近発見された, cf. 細田. P 5 の



残りの部分に関しては下記 no. 33 参照。

22. 『薬師琉璃光如来本願功德経』

(i) (a) P6, (b) 敦煌, (c) TSP 82-92, (d) T.T. 450, vol. 14, 406 c 20-408a8.

(ii) (a)  $Ti\alpha$  (=So 10402), (b) ツォルフアン, (c) 未発表, cf. Utz 1978, 13, (e) Utz は, ソグド語版は既存のどの漢訳よりも短いことから, かつて存在し今は失なわれた原典からの翻訳かもしれないという。<sup>(29)</sup>

23. 『央掘魔羅経』

(a) P 2, 11. 914-39, (b) 敦煌, (c) TSP 43-44, (d) T.T. 120, vol. 2, 540c 22-27.

24. 『佛説犯戒罪報軽重経』

(a) TM450 (=So 18400), Recto 11. 1-20, (b) ツォルフアン, (c) Kudara and Sundermann 1987 及び plate XII, (d) T.T. 1467, vol. 24, 910c10-13 及び n. 40, (e) 漢訳のテキストの異同とソグド語訳との関係については, Kudara and Sundermann 1987, 334-37 参照。この写本の残りの部分に関しては次項を参照せよ。

25. 『佛説時非時経』

(a) TM 450 (=So 18400), Recto 11. 21sq. 及び Verso, (b) ツォルフアン, (c) Kudara and Sundermann 1987 及び plate XII, XIII, (d) T.T. 794, vol. 17, 738b, 739a, (e) ソグド語訳は漢訳の写本中では古いものより一致するという, cf. Kudara and Sundermann 1987, 338-42. しかし直接の原典が何であったかについての問題は解決されていない, cf. Sundermann 1989, 15. 下記 no. 44 は同じ貝葉群からの一葉である。

26. 『鸚鵡経』に対する序文と冒頭の一部

(a) L93 (=O<sup>2</sup>), (b) 敦煌, (c) Ragoza, 63-66, (d) 序文の後の經典の本文は非常に短いため, Lévi が研究した諸言語のテキストとの関係は不明であ

---

(29) 百濟氏によれば, ベルリンのコレクション中に, (ii) とは別のソグド語訳もあるという。

る。『鸚鵡經』については Lévi 1932 及び山田参照。梵語で Śukha と名付けられたバラモンは、ソグド語では ptm'pr'yš と呼ばれる。また Śankh-akuñjara という名の犬は、c'wšr という。紙背に書かれたチベット文は myi dge bchu bshad pa'i dar ma'<sup>(30)</sup>「10の悪業についての法」と読める、cf. Rosenberg, 401. これは『鸚鵡經』の内容とよく合致しており、表のソグド文の内容を表わすためのメモであったのだろう。

27. 『佛說灌頂七万二千神王護比丘呪經』

(a) L57, (b) トゥルフアン, (c) T.T. 1331, vol. 21, 531a15-20.<sup>(31)</sup>

F. 偽 經

28. 『善惡因果經』

(a) P4, (b) 敦煌, (c) MacKenzie 1970 及び BSTBL 153-58, (d) T.T. 2881, vol. 85, 1380-83, (e) 写真版は Gauthiot and Pelliot によって出版された。

29. Dhūta-sūtra

(a) Or 8212 (160), (b) 敦煌, (c) BSTBL 33-51, (e) Demiéville は『仏為心王菩薩說投陀經』(T.T. 2886, vol. 85) の失なわれた部分に対応すると考え、彼の説は一般に受け容れられている。彼はまた『梵網經』に対応する部分(T.T. 1484, vol. 24, 1008a)があることも指摘した、cf. Demiéville, *apud* Benveniste 1933, 240.

30. 『法王經』

(i) (a) Otani 2326, 2922, 2437, (b) トゥルフアン, (c) 吉田 1985, 50-54, 62-63, (d) T.T. 2883, vol. 85, 1384c17-23.

(ii) (a) P23, (b) 敦煌, (c) TSP 157, (d) T.T. 2883, vol. 85, 1386c22-28.<sup>(31)</sup>

31. 『究竟大悲經』

(a) P9, 11. 102-44, (b) 敦煌, (c) TSP 123-25 及び吉田 1984, (d) T.T.

(30) チベット語の転写と翻訳には武内紹人氏の援助を受けた。

(31) 筆者が最近比定した。

2880, vol. 85, 1376b9-26, (e) P 9 の残りの部分については下記 no. 39参照.

32. 『大方広華嚴十悪経』

(a) P2, 11. 977-1026, (b) 敦煌, (c) TSP 46-48, (d) T.T. 2875, vol. 85, 1360c12-24.<sup>(31)</sup>

33. 『受八斎戒儀』

(a) P 5, 11. 89-125 及び P 17, (b) 敦煌, (c) Yoshida 1984a, (e) このソグド語のテキストと類似の漢文仏典が敦煌から多数みつかっている, cf. Yoshida 1984a, 170, n.4. P 5 と P 17 は本来同一の写本であったものの離れである. 細田は最近, 『長爪梵志経』とそれに後続する八斎戒関係のテキストから成り立っているという点で, P 5+P 17 と全く同じ構成のサンスクリット写本を発見した, cf. 細田.

34. 空を論じる未比定の仏典

(a) P 16, (b) 敦煌, (c) TSP 142-44, (e) ソグド語のテキストは, 梵文の『般若心経』に後続する, 『心経』の真言もソグド語に翻訳されている, cf. H. W. Bailey, 936-37. 『維摩経』からの引用とソグド語のシンタックスを無視した直訳体から, 禅宗関係の漢文仏典からの翻訳であると推定される, cf. Yoshida 1984, 145-46; idem, 1984a, 169. 最後の1行は本文と同じ筆蹟であるが, 言語はウィグル語である, cf. Sims-Williams and Hamilton, 40.

G. その他の未比定の仏典

35. Prasenajit fragment

(a) TM 407 (=ST ii 9), (b) トゥルファン, (c) ST ii 548-50, (e) 波斯匿王 (prsn'yicy) の質問とそれに対する仏陀の答えを内容とする. 転輸聖王の出現の時代に関する質問と応答は, 『阿毘達磨俱舍論』に対応箇所 (T.T. 1558, vol. 29, 64b19-20, 25-27) がある, cf. Yoshida 1986, 519. 筆者はそこで, 『俱舍論』の対応箇所はソグド語訳の原典であった何らかの

阿含經典にもとずいたものである可能性を示唆しておいた。<sup>(32)</sup> Hansen は、ドイツのトゥルフアン探検隊の収集品の中に、波斯匿王が現われるソグド語仏典がもう 1 点あるという、cf. Hansen, 88.

36. Upaka と仏陀の争いに関する仏典

- (a) L 35a, 35b, 36, 40, 49, 50, 52, 81, 89 (同一の写本からの離れである),  
(b) トゥルフアン, (c) Ragoza, 29, etc. 及び Sims-Williams 1981, 235,  
(e) L 40 にみえる Upaka ('wp'k') と仏陀の争いは, Upakamaṇḍikaputtā<sup>(33)</sup>が 登場する Aṅguttara Nikāya IV, 188 に似ている. この断片群に含まれている話が, 1 つである必要はなく, Upaka との争いの話を含むいくつかの小經典を集めた写本であった可能性もある.

37. 『酒を誡める経』

- (a) Or. 8212 (191), (b) 敦煌,<sup>(34)</sup> (c) BSTBL 7-11, (e) 経名はソグド語で mstk'r'k cš'nt prxwn pwst'k 'yw prw'rt 「酒を誡める經典一卷」. 奥書きには, 「安姓の ctβ'r'tsr'n の依頼により, 洛陽で開元16年にインド語から翻訳した」とある. MacKenzie は, 実際には中国語から翻訳されたものを, 無意識に或いは権威づけの為にインド語から訳したとしたのだろうとする.<sup>(35)</sup>

38. 『食肉を誡める経』

- (a) P2, (b) 敦煌, (c) TSP 3-58 及び Henning 1946, 714-26, (e) P2 の

- 
- (32) もう一つの可能性は、『俱舍論』をもとにソグド人が新たに経を創作したというものである. しかしこれは非常に考えにくい. トカラ語から訳されたソグド語仏典が存在することを考慮すれば, トカラ仏教がこの種の阿含經典を保持しており, それからソグド語訳したと考えるのが妥当ではなからうか.
- (33) この推定が正しいとすれば, この写本もトカラ仏教が保持していた經典からの翻訳である可能性が出てくる.
- (34) 大英図書館のカタログでは, 出土地を敦煌としてクエスチョンマークを付ける. 紙の保存の状態は良いので, 敦煌出土と考えて間違いないだろう.
- (35) その根拠として, 煩惱 (Skt. kleśa-) を意味する wtxy sryβ't'm という語句が用いられていることに言及する. wtxy sryβ't'm は漢語の煩惱の逐語訳と考えられているから, この句があれば漢文を原典とした可能性が高いという主張である. wtxy も sryβ't'm もそれ自体の意味が明確ではないので, 煩惱の逐語訳かどうかは分らない. またこの表現が煩惱の訳語として成立したものだとしても, 煩惱 (=kleśa) の訳語として定着していれば梵語の kleśa を翻訳する際にも使われ得たと考えられる. それ故 MacKenzie の主張はあまり根拠の強いものではない.

比定された部分については上記 nos. 18, 23, 32 参照。いくつかの漢文仏典から引用しつつ、肉食を誡めることに終始している。なおドイツのトゥルファン探検隊の収集品 T ii 821a は、P 2, 11. 72-89 と同じテキストを含んでいる、cf. Yoshida 1986, 520 n. 1a.<sup>(36)</sup> この部分も何らかの経典からの引用である可能性がある。

39. P 9, P 10, P 11

(b) 敦煌, (c) TSP 118-29, (d) 比定された部分については上記 no. 31 参照。3つの断片が同一の写本の離れであることは Sims-Williams が明らかにした、cf. BSOAS 38, 1975, 134. 善悪を問わず存在するものには区別がなく、本来同じものであり、仏法に外ならないことを繰り返して述べている。禅宗関係の文献ではないかと思われる。

40. P 14, P 15, P 30

(b) 敦煌, (c) TSP 137-41, (e) 3断片は同一の写本の離れである、cf. Sims-Williams and Hamilton, 11.<sup>(37)</sup> 漢訳の如意輪観音関係の文献を集めて作ったテキストであったようだ。比定された部分については上記 nos. 5 (ii), (iii) 及び 6 参照。ブラーフミー文字による真言は仏部三昧耶呪(P14, 1. 30), 触護身明(P15, 1. 14)及び浄水真言 (P 15, 1. 15) である。

41. P 20

(b) 敦煌, (c) TSP 151-52, (e) 肉体の薬と悟りによる精神の薬との比較が為される。従ってこれは薬学関係の文献ではあり得ない、cf. Hansen, 89.

42. P 21 (3断片)

(b) 敦煌, (c) TSP 153-55, (e) 食肉と飲酒の弊害を説く。夜叉たちが <sup>(38)</sup> Ānanda という名の阿闍利から戒を受けることを願う。

43. P 22

(b) 敦煌, (c) TSP 156, (e) 密教占星術関係の文献である。惑星の示す悪

(36) この断片の写真版は G. Franz 1987, 101 に発表されている。

(37) Henning, BSOAS 11, 1945, 465 n. 2 は P 14 と P 15 は異なる写本であるとする。

(38) P 21b, 1. 9 は "n'nt "c'ry と読むべきである。

い兆候が説明されている。類似の文献については A. Howard 参照。

44.  $Ti\alpha$  (=So 10100 i)

- (b) トゥルフアン, (c) Henning 1940, 59-62. さらに Kudara and Sundermann 1987, 347-48 及び plate XIV, XV も参照, (e) この貝葉は, 上記 nos. 24, 25 (=So 18400) と同じ貝葉群の一葉である。この貝葉本全体は, 短い経典を集めたものであった可能性がある。奥書きによればクチャ語から翻訳されたこの仏典の名は,  $\mathit{\text{šm'r'kh p\acute{o}kh [ywk]}$ (') であり, これを Sundermann は  $\text{Samjñādharmāḥ-yoga}$  と還梵した, cf. Sundermann 1989, 16.

H. Hansen が言及する未発表のドイツ隊将来<sup>(39)</sup>仏典

- (i) Mahākaruṇapūṇḍarika-sūtra  
(ii) Mahānirvāṇaparama-sūtra  
(iii) Brahmajāla-sūtra

これらの仏典が実在するのかどうか何ら知る術がないが, ベルリンのコレクションの全貌が解明される過程で, 近い将来明らかになることが期待される。

最後に, ベルリンのコレクション中の極彩色の絵入りの仏典に言及しておきたい。この種のもは現在までのところ他に例がない。これは MIK III の編号を持つ資料で, 現在 *Museum für Indische Kunst* に保管されている。テキストを殆んど残さない面の写真だけが発表されている。背面のテキストは未発表であるものの, Sundermann による英訳が写真版に添えられている。<sup>(40)</sup> 今のところその訳文から内容の比定を行うことはできないが, それが可能になり, 紙質や画材・画法などが明らかになれば, ソグド仏典に関する我々の知見を拡大することになるであろう。

(39) 上記 nos. 1 (ii), 35も参照せよ。

(40) *Along the ancient Silk Routes. Central Asian Art from the West Berlin State Museums, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1982, 181-82 (No. 120) 参照。* 日本語版は東京国立博物館他編集『ドイツ・トゥルフアン探検隊西域美術展』, 東京, 1991, 181 (No. 125) 参照。この絵にはマニ教の写本美術の技法が応用されているという。それが事実であれば, マニ教から仏教へ改宗したウィグル人がソグド語に翻訳した仏典である可能性がある。ソグド仏典の一部にみられるマニ教ソグド語の要素については, 吉田1991, 68-73も参照せよ。

参 考 文 献 及 び 略 号

- H. W. Bailey, 'Irano-Indica, IV', *BSOAS* 13, 1951, 920-38.
- S. Beal. (tr.), *The life of Hiuen-Tsiang by shaman Hwi Li*, London, 1911.
- A. M. Belenitskii and Marshak, B. I., 'The paintings of Sogdiana', in: G. Azarpay, *Sogdian painting*, Berkeley, 1981, 11-77.
- E. Benveniste, 'Notes sur le fragment sogdien du *Buddhadhyānasamādhisūtra*', *JA* 223, 1933.
- , *Codices Sogdiani*, Copenhagen, 1940.
- , *Textes sogdiens*, Paris, 1940a.
- , *Vessantara Jātaka*, Paris, 1946.
- F. Bernhard, *Sanskrittexte aus den Turfanfunden X: Udānavarga*, 2 vols., Göttingen, 1965-68.
- BSTBL=MacKenzie 1976.
- K. Das Gupta, *Viśvantarāvadāna. Eine buddhistische Legende*, Berlin, 1978.
- M. Dresden, 'Sogdian language and literature', in: E. Yarshater (ed.), *The Cambridge history of Iran*, vol. 3 (2), Cambridge, 1983, 1216-29.
- G. Ehlers, *Altürkische Handschriften*, Teil 2, Stuttgart, 1987.
- R. E. Emmerick, 'Buddhism among Iranian peoples', in: E. Yarshater (ed.), *The Cambridge history of Iran*, vol. 3 (2), Cambridge, 1983, 949-64.
- H. G. Franz, *Kunst und Kultur entlang der Seiden Strasse*, Graz, 1987.
- W. Fuchs, 'Huei-ch'ao's Pilgerreise durch Nordwest-Indien und Zentral-Asien um 726', *SPAW*, phil.-hist. Kl., Berlin, 1938, 426-69.
- A. von Gabain, 'Alt-türkische Texte in sogdischer Schrift', in: *Hungaro-Turcica. Studies in honour of Julius Németh*, Budapest, 1976, 69-77.
- R. Gauthiot, 'Une version sogdienne du Vessantara Jātaka', *JA*, 1912, 163-93, 429-510.
- R. Gauthiot and Pelliot, P., *Le sūtra des causes et des effets du bien et du mal*, Paris, 1920-28.
- O. Hansen, 'Die buddhistische Literatur der Sogdier', *HbO, Iranistik* II, 1, 1968, 83-90.
- W. B. Henning, 'Neue Materialien zur Geschichte des Manichäismus', *ZDMG* 90, 1936, 1-18.
- , *Sogdica*, London, 1940.
- , 'The book of the giants', *BSOAS* 11, 1943, 52-74.
- , 'The Sogdian texts of Paris', *BSOAS* 11, 1946, 713-40.
- , 'The name of the "Tokharian" language', *Asia Major* N. S. 1, 1949, 158-62.

- 細田典明, 「梵文『雜阿含經』仏所説品外道相應 (II)」, 『印度哲学仏教学』第4号, 1989, 140-53.
- A. Howard, 'Planet worship: some evidence, mainly textual, in Chinese esoteric Buddhism', *Asiatische Studien* 37, 1983, 104-19.
- 池田 温, 「敦煌の流通経済」, 『講座敦煌3 敦煌の社会』, 東京, 1985, 297-343.
- 岩本 裕, 「如意輪観音の原名について」, 『足利惇氏博士喜寿記念オリエント・インド学論集』, 東京, 1978, 411-22.
- K. Kudara and Sundermann, W., 'Zwei Fragmente einer Sammelhandschrift buddhistischer Sūtras in soghdischer Sprache', *AoF* 14, 1987, 334-49.
- , 'Fragmente einer soghdischen Handschrift des *Pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitā-sūtra*', *AoF* 15, 1988, 174-81.
- , 'Fragmente einer soghdischen Handschrift des *Viśeṣacinti-brahma-paripṛcchā-sūtra*', *AoF* 18, 1991, 246-63.
- Sh. Kuwayama, 'Literary evidence for dating the colossi in Bāmiyān', in: G. Gnoli and Lanciotti, L. (eds.), *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata*, Rome, 1987, 704-27.
- L=Ragoza の発表したレニングラード所蔵のソグド語文書.
- de La Vallée Poussin and Gauthiot, R., 'Fragment final de la Nilakantha-dharani', *JRAS* 1912, 629-45.
- S. Lévi, 'Nilakanthadharani', *JRAS* 1912, 1063-66.
- , *Mahākarmavibhaṅga (la grande classification des actes) et karmavibhaṅgopadeśa (discussion sur le mahākarmavibhaṅga)*, Paris, 1932.
- D. Maue and Sims-Williams, N., 'Eine sanskrit-sogdische Bilingue in Brāhmi', *BSOAS* 54, 1991, 486-495.
- R. O. Meiszahl, 'The Amoghapāśa-hṛdaya-dhāraṇī', *Monumenta Nipponica* 17, 1962, 265-328.
- 森安孝夫, 「ウイグル語文獻」, 『講座敦煌6 敦煌胡語文獻』, 東京, 1985, 1-98.
- F. W. K. Müller and Lentz, W., *Soghdische Texte II SPAW*, phil.-hist. Kl., 1934, 504-607.
- B. Nanjio, *A catalogue of the Chinese translation of the Buddhist Tripitaka*, Oxford, 1883, repr. Taipei, 1975.
- P=Pelliot sogdien.
- A. N. Ragoza, *Sogdijskie fragmenty central'noaziatskogo sobranija Instituta vostokovedenija*, Moscow, 1980.
- H. Reichelt, *Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums*, I. Teil, Heidelberg, 1928.
- 榮新江 (Rong Xinjiang), 「曹議金征甘州回鶻史事表微」, 『敦煌研究』1991年第2期, 1-12.



- F. Rosenberg, 'Deux fragments sogdiens bouddhiques du Ts'ien-fo-tong de Touen-houang II (1)', *Izvestija AN*, 1920, 399-420.
- N. Sims-Williams, 'The Sogdian fragments of the British Library', *IJ* 18, 1976, 43-82.
- , 'The Sogdian fragments of Leningrad', *BSOAS* 44, 1981, 231-40.
- , 'Indian elements in Parthian and Sogdian', in: K. Röhrborn and Veenker, W. (eds.), *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, Wiesbaden, 1983, 132-41.
- , 'Sogdian', in: R. Schmitt (ed.), *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden, 1989, 173-92.
- N. Sims-Williams and Halén, H., *The Middle Iranian fragments in Sogdian script from the Mannerheim collection* (Studia orientalia, LI/3) Helsinki, 1980.
- N. Sims-Williams and Hamilton, J., *Documents turco-sogdiens du IX<sup>e</sup>-X<sup>e</sup> siècle de Touen-houang*, (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III/III), London, 1990.
- ST ii=Müller and Lentz.
- W. Sundermann, Review of *BSTBL*, *BSOAS* 40, 1977, 634-35.
- , 'Die Bedeutung des Parthischen für die Verbreitung buddhistischer Wörter indischer Herkunft', *AoF* 9, 1982, 99-113.
- , 'First results of cooperative work between Ryukoku University and the Academy of Sciences of GDR on Buddhist Sogdian Turfan texts', *The annual of the Institute of Buddhist Cultural Studies Ryukoku University* 12, 1989, 12-18.
- TSP=Benveniste 1940a.
- D. A. Utz, *An unpublished Sogdian version of the Māhāyāna Mahāparinirvāṇasūtra in the German Turfan collection*, Unpublished Ph. D. thesis, Harvard University, Cambridge, Mass., 1976.
- , *A survey of Buddhist Sogdian studies*, (Bibliographia Philologica Buddhica, Series Minor III), Tokyo, 1978.
- , 'India and Sogdiana', in: P. Gaefke and Utz, D. A., (eds.), *The countries of South Asia: boundaries, extentions, and interrelations*, Philadelphia, 1988, 22-39.
- F. Weller, 'Bemerkungen zum soghdischen *Dirghanakha-sūtra*', *Asia Major* 10, 1935, 221-28.
- , 'Bemerkungen zum soghdischen *Vimalakīrtinirdeśasūtra*', *Asia Major* 10, 1935, 314-64.
- , 'Bemerkungen zur soghdischen *Vajracchedikā*', *AO* 14, 1936, 112-46.
- , 'Bemerkungen zum soghdischen Dhyāna-Texte', *Monumenta Serica* 2, 1936-7, 341-404 and 3, 1938, 78-129
- , 'Zum soghdischen *Vimalakīrtinirdeśasūtra*', *Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes*, Bd. 22, Nr. 6, 1937.
- 吳其昱 (Wu Chi-yu), 「論伯希和粟特文寫本二號之年月」, 『敦煌學』, 第12輯, 1987, 1-4.

- 山田竜城, 「鸚鵡經」, 『文化』 2-3, 1935, 103-113.
- Y. Yoshida, 'Sogdian miscellany', *StIr* 13, 1984, 145-49.
- , 「ソグド語の『究竟大悲經』について」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』 27, 1984, 76-94.
- , 'On the Sogdian formula for receiving the eight commandments —Pelliot sogdien 5 and 17—', *Orient* 20, 1984 [1984a], 157-72.
- , 「大谷探検隊将来中世イラン語文書管見」, 『オリエント』 28/2, 1985, 50-65.
- , 「ソグド語文献」, 『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』, 東京, 1985 [1985a], 185-204.
- , 'Buddhist Sogdian notes', in: R. Schmitt and Skjærvø, P. O. (eds.), *Studia Grammatica Iranica. Festschrift für Helmut Humbach*, Munich, 1986, 513-24.
- , 'Some new readings of the Sogdian version of the Karabalgasun inscription', in: A. Haneda (ed.), *Documents et archives provenant de l'Asie Centrale*, Kyoto, 1990, 117-23.
- , 「ソグド語雑録 (III)」, 『内陸アジア言語の研究』 V, (神戸市外国語大学外国学研究所研究 XXI), 1989 [1990a], 91-107.
- , 「新疆维吾尔自治区新出ソグド語資料」, 『内陸アジア言語の研究』 VI, (神戸市外国語大学外国学研究所研究 XXIII), 1990 [1991], 57-83.
- P. Zieme, *Religion und Gesellschaft im Uigurischen Königreich von Qočo*, Westdeutscher Verlag, 1992.

本稿は三菱記念財団人文科学助成金（研究題目「中央アジア出土法律文書の研究」）による研究成果の一部である。

## 後 記

大谷探検隊将来の3断片（竜谷大学図書館，西域文化資料 nos. 2099, 2146, 2919）は，この同じ写本からの離れである。なお No. 2919はT. T. 374, vol. 12, 489a 11-15に対応する。